

日本人がめざすべき英語

田 中 実*

The Kind of English That Japanese People Should Learn

Minoru TANAKA

要 旨

英語をめぐる現代世界の変化を背景として、日本人が学ぶべき英語とはどのようなものであるかを検討、提案する。世界諸英語・国際共通英語という現実の状況が出現し、そのために「学ぶべき英語」も一つの種類ではなくなった。英語を学ぶ目的も英語圏文化への同化というわけではなく、「道具的 (instrumental)」で、コミュニケーションのためというのが主流になっている。Non-native の英語話者が native 話者の数を越えて圧倒的増えたためもあり、英語の使用相手は native とは限らない。むしろ non-native との会話が多い。当然ながら non-native どうしの会話も多くなっている。また、英語母語圏とそれ以外との国々との国力の差も以前ほど大きくはなくなっている。このような状況を踏まえて、日本人が学ぶべき英語として、日本人的なアクセントを残しながら、また日本的な表現を保ちながらも、国際的に理解しやすいものを目的とすべきと論じた。

キーワード：native, non-native, 目標言語, 世界諸英語, 国際共通語

1. 序論 (目的と背景)

一昔前は、英語を学ぶ際に対象となるのは、アメリカ英語、イギリス英語であった。現在でも、日本ではこの二つの英語が学習対象となっている。しかし、以前ほどではない。この二つを英語学習目標にすることに異論も多く出てきている。異論というのは、イギリス英語、アメリカ英語以外の、それらが世界に広がったところの影響を受けた英語を認めていこうということである。以前であれば、ブロークンな英語、ノン・スタンダードな英語、劣等な英語と捉え

*教授 英語学・英語教育

られていた。このような異論が出てくる背景には、英語をめぐる日本の内外の変化、世界的な変化があると言える。そうした変化は、日本でも英語学習のあり方に影響を与えつつある。

以下では、どのような英語をめぐる変化があり、それをもとにどのような英語を日本人学習者は目的とすべきかを論じたい。

2. アメリカ英語、イギリス英語を目標学習言語としない世界的変化

2.1 「世界諸英語」観の出現

この英語観、世界の英語のあり方、捉え方については、すでに田中（2015）においても取り上げたが、再度田中（2015）に基づいて説明を行う。

英語を取り巻く世界の環境の違いという点については、いわゆるネイティブ英語オンリーから様々な英語変種に価値あるいは地位が認められてきている。つまり、英米の英語だけを標準とする立場から、英語が全世界に広まった結果生まれた様々な種類の英語も正当 (legitimate) なものと認めるということである。正当な英語が複数あるという意味で、複数形で World Englishes (世界諸英語) と呼ばれる。そうすると、「同じ」英語を使っても互に通じ合わない可能性も出てくる。そこから共通英語、国際英語、あわせて国際共通英語という考えが主張されるようになってくる。このようになってきたもっとも大きな理由としては、英語を使用するノン・ネイティブの数がネイティブの数を圧倒するようになってきたからと言える。これは歴史上例を見ないことである (Crystal 2004)。ラテン語、フランス語など歴史的にリンガ・フランカとして使用された言語もノン・ネイティブがネイティブをこれまで上回ることはなかった。

このような英語観は、Kachru (1986, 1992) の「世界諸英語 (World Englishes)」, Smith (1976, 1983) の「国際語としての英語 (English as an International)」, Smith (1976, 1978), 森住 (2008) などによる「国際補助語としての英語 (English as an International Auxiliary Language)」, そして Jenkins (2000, 2006, 2007) の「国際共通語としての英語 (English as a Lingua Franca)」などに代表される。

田中 (2013) で記したように、このような英語に対する考えは日本でも鈴木 (1999), 本名 (2003) などにより提唱されてきている。そして、大学英語教育学会が第 47 回大会 (2008) において『グローバルな英語コミュニケーション能力とは — 英語教育再考』というテーマでこの問題を大きく取り上げている。そこでは、Jennifer Jenkins 氏が “English as a Lingua Franca”, 矢野安剛氏が『英語のグローバル化とその教育』, Salikoko S. Mufwene 氏

が “Global English” vs. “English as a Global Language”, そしてこの3者によるシンポジウム “What is Global English Communicative Competence?: Models, Standards, and Pedagogy for the Teaching of English in Japan.” がこの問題を特に論じている。さらに、大学英語教育学会第50回国際大会(2011)でも、吉川・日野・松田・石川(2011), Matsuda(2011)及びYano, Bianco, Park, and Honna(2011)による発表が、国際共通英語をこれからの英語のあるべき姿として論じている。鳥飼(2011)も同様の趣旨のことを述べている。さらに最近では、吉川(2014)がこのテーマを取りあげている。

世界諸英語という観点から、我々日本人が得ることは大いにある。例えば、インド英語においては(Honna 2008), インド式の英語発音でことをすませる。我々日本人は、一つには英語の発音につまずき、英語の使用がスムーズに行かない。だが、インドでは、発音については気にせず、つまりリラックスして文法、語彙に多くの時間と労力を割くことができ、自らをよりよく表現できる。英米英語の特徴である「スタンダード」な英語の発音を真似ることよりも、発音としては若干個性さを伴うが自らを表現することに主眼を置く。

発音の面だけではない。世界諸英語というのは、母語ではないが国内言語として使用される(intranational language)。そのため、その第2言語、公用語として使われる英語がその国、文化、その母語の影響をはっきりとうかがわせる。はっきりと反映させたものとなっている。例えば、インド英語では、本来の英語では不要な good, kindly などを挿入した表現が多用される。“My I have your good name?” “Kindly please advise me.” などである。また、シンガポール英語では、You’re very tired lah. のように付加語をつける。Lah は「～ね」, 「～だよ」などの意味を表す。また、シンガポール英語に限らないが、語を繰り返すことで強調を表す。例, “Can can.” (よくできる), “Cheap, cheap.” (すごく安い) など。

こうしたそれぞれの地域の特性を反映した英語を是とするならば、日本的なスタイルの英語も認められるべきであろう。例えば、native な英語であれば、“How are you, Tom?” というふうに名前を後につけるであろうが、日本的な環境であれば、普通名前は呼ばない。つまり、日本人英語として “How are you?” と使って問題はないだろう。How are you? の後に人の名前を呼ぶかどうか、言語の問題というよりは、文化的な問題、文化的な表現のスタイルの問題であろう。また、How are you? と聞かれて(挨拶されて)、その返事も日本人であれば、“Great, Pretty good.” とはならず、“So so.” という返事がよく使われたりする。日本語の「まあ、まあ」の英語表現である。これも、日本の文化・慣習を反映した表現の仕方の言語転移である。そして日本人である我々がこのように表現(返事)したから、するからといって、何ら批判されるべき筋合いはない。

2.2 英語を使う目的, 学習の目的

現在これほどの英語の世界的な広がりを見せている理由の一つは、英語使用の目的がコミュニケーションになっているからと考えられる。したがって、英語学習の現在の主要な目的は、それをコミュニケーションのために用いることであることが多い。多くの場合、英語の使用、英語の学習の目的がコミュニケーションであるとする、そこにはその目的に応じた英語学習のあり方というものができる。

例えば、ビジネスに英語を使用するのであれば、特にビジネスに特化した英語が必要である。TOEIC と TOEFL の違いを見るとわかりやすい。後者はアメリカの大学に入るために必要な英語テスト、アカデミックな英語能力が測られる。前者はビジネスにおける英語の能力を測定する。ビジネス、アカデミックな世界でもその専門領域によって英語も異ってくる。貿易、企業、経営、医療分野、電子工学、それぞれ異なる。Native であれば、その国に生まれ、育ち、暮らす。あらゆる日常の英語が必要であり、実際それらを学習する。だが、ときおり海外に学会発表に行く場合、例えばアメリカに行くとして、その日常的な英語をマスターする必要はない。以前、和英辞典で「運動会」は athletic meeting であると習ったが、アメリカではそうは言わない、field day だと言う。だが、そのような「native の知識」は、ここでの学会発表という目的にはまったく不必要である。アメリカで住むわけではないのである。さらに、どの国に行くかにもよる。アメリカ英語を学習し、アメリカで使用する日常語を学んだとしても、インドに行った場合、それがそのまま役立つわけではない。インドに行けば、インド風の英語の知識が必要である。まして、英語が外国語として話されている国、例えばインドネシアに行ったとして、アメリカの日常語がどれほど役立つのか、きわめて疑問である。アメリカのスーパーマーケットでの英語の用語がそのままインドネシアのスーパーで使えるわけではないだろう。そこは非英語圏である。英語がまったく通じないかもしれない。ノン・スタンダードな、あるいは「ブローケン」な英語が使われていればいい方である。

また、一部の例外を除いて non-native 英語学習者の日常は英語と無関係である。英語圏で生まれ、英語圏で生活する native とは異なる。日常のほとんどは英語以外の言語（母語）で過ごす。こうした環境下で過ごしながら、ある特殊なコミュニケーションの目的のために英語を学習し、使用するのである。したがって、目的に沿った英語の学習が合理的な選択であろう。

英語学習者の国と母語英語圏の国との国力の差の減少も英語学習、英語使用のあり方に影響を与えていると思われる。例えば、日米の政治的、経済的な、文化的、国力の違いは以前に比べて明らかに小さくなってきている。例えば、そのためと思われるが、若い世代の人々はアメリカ（文化）への憧れをあまり持っていない。少なくとも以前のような憧れは持っていない。

したがって、アメリカに憧れて、アメリカ文化に同化しようとして英語を学ぶ人は少なくなっている。つまり、アメリカ文化に憧れて、アメリカ英語の発音を真似ることを目的とし、あらゆるアメリカ的な英語を学習しようという者は少なくなっている。

かつて第二言語研究で取り上げられた「統合的動機 (integrative motivation)」「道具的動機 (instrumental motivation)」(Gardner and Lambert, 1972) という観点から見ると、現在では英語学習において後者の道具的動機が明らかに大きな役割を果たすようになっている。

2.3 英語を使用する相手

英語話者だけを見れば、明らかに native よりも non-native の方が多くなっている。(通常においては、母語話者の方が非母語話者よりも断然多い。英語については、歴史的にこれまで存在しなかったケースである。) したがって純粋に英語を使用する相手の確率だけを見れば、non-native の方が多いと考えられる。もっとも、実際問題として、native 話者との使用が多くなることもある。英語母語話者圏との交流、ビジネスが多い場合である。

だが、全体としては、日本人は英語非母語話者との会話が多くなっていると考えられる。というのは、母語話者・非母語話者の比率の後者への傾斜と英語母語圏の国々の世界全体のなかでの相対的な国力低下をしているからである。次にあげるのは、そのような傾向を示す状況である。まず、日本への外国人訪問者数では、英語母語話者は少数派である。北米 (アメリカ・カナダ)、イギリス、オーストラリアからの日本訪問者よりも、韓国、中国、台湾、その他アジアの国々からの方が圧倒的に多い (「2015 年 国籍別 / 目的別 訪日外客数 (確定値)」, 出典「日本政府観光局 (JNTO)」)。

日本人の海外渡航者数についても、依然としてアメリカ本土、それにハワイ、オーストラリアなどへの渡航が多いが、中国、韓国、台湾など非英語圏、その他英語を母語としない、つまり non-native の英語圏の国々への渡航が数多い (日本旅行業協会 (JATA)「海外旅行者の旅行先トップ 50 (受入国統計)」)。

ビジネス相手も英語圏相手がほとんどというわけではない。それをよく示す例としては、アジア各国との貿易である。日本はアジアの一部であり、もちろんアジアの他の国々と地理的に近い。アジアの多くの国の経済的重要性が世界の中でどんどん増してきている。そうしたアジアの国々との経済的交流がきわめて活発に行われてきている。そして、そこでのもっとも重要な仲介言語は英語となる。我々は互いに英語にたいして non-native である。

また、世界的に見て、英語圏以外の人々による政治的、経済的、文化的 (スポーツも含めて)、科学的な領域における発言力が強くなってきている。そうした人々とのコミュニケーションの

多くは英語で行われる。

3. 英語そのものの世界言語としての重要性はかわらない

アメリカ英語、イギリス英語を英語学習の目標としようという考え方からは変化してきているが、英語そのものの重要さは変わらない。その広がりからして一層重要性を増してきているとも言える。

Non-native speakers が native speakers よりも圧倒的に多いということはすでに述べた。そのことは、それだけ英語が重要であることを示している。Native よりも non-native の方が多いということは、それだけ多くの人が英語を使っている、英語が必要となっているということである。Non-native が native を超えるというのは言語の歴史上これまでなかった。つまり、歴史上、一つの言語がこれほど重要になることはなかったのである。

インターネット、サイバー世界で英語が主流になると言われたときもあったが、それは事実ではなかった。日本で、そのほかの国でも、それぞれの言語がインターネットで使われている。日本で、コンピュータ、ましてネットを使うのに英語は必要ない。わずかに必要であっても、カタカナ英語でほぼ十分であろう。同様に、日本にいて通常の生活をする上においては、英語はなくても問題はない。少なくとも英語の speaking, listening, writing の能力は必要ない。そのようなものがなくても、十分豊かな楽しい生活を送ることができる。ただし、国境を越えての話になると、英語が何にもまして必要になる。一つの例として、Honma (2012) は日産・ルノーの提携をあげている。日産とルノーが提携したとき、ルノーはフランスの会社であるが、両会社のホーディング・カンパニーはオランダに置いた。だが、使用する言語はフランス語でもオランダ語でもなく英語であった。

4. 現代世界の中で日本人のめざすべき英語

4.1 Native の英語をターゲットとすべきでない

英米の英語学習の最終目標とすることは、日本人の英語はいつまでも中間言語となってしまう。どんなに必要なコミュニケーションができようとも、発音、表現の仕方が native のものと同質のものでなければマスターしたことになる。そもそも英語を使うにあたって、「マスター」しなければならないものなのか。先にも述べたようように、英語学習、英語使用はコミュニケーションのためのものである。アメリカ人、イギリス人になるためのものではない。

以上のように native の英語をマスターしようとするのは現実的ではない。そして、成人してからの native の英語の習得はほぼ永遠の課題になってしまう。もしそれが誇張であるとしても、その習得のために異様な時間を費やすことになるであろう。だが、はたしてその価値があるのだろうか。言語の本来の目的、コミュニケーションという目的からすると、合理的な考え方だと思えない。英語学習のために費やされる時間をもっともっと他の生産的なものに使えるはずである。

また、native の英語のマスターを目標とすることは、無意味な劣等意識を生み出してしまう。英語を日々日常に使っている native の人々と、ときおりコミュニケーションのために、ある特定の目的のために英語を使う我々日本人とを比べるのは、公正さにまったく欠ける。このような英語を取り巻く環境が両者大きく異なるにもかかわらず、英語学習の目標を単純に native の英語としてしまうのは、適切とは言えない。Native の英語を単純に目標としてしまうことは、英語にたいして本来抱くべきでない未達成感を持たせてしまう。そして、そうしたネガティブな感情は、英語嫌いを作り出す。さらにそれが再生産、そのまた再生産を作り出していく。日本の英語教育者は、それを長年見てきている。

4.2 めざすべき日本人英語の具体的な姿

具体的と言っても、もちろんその詳細が必要なわけではない。ここでは、具体的にどのような日本人英語を指しているのかを示したい。

発音

日本人アクセントの許容である。本論文がまさに主張しているところである。英語 native の発音に同化する必要はまったくない。ただ、通常日本人どうして英語コミュニケーションするわけではなく、相手はほとんど外国人である。したがって、日本人アクセントを容認するといっても、相手（外国人）にとってわかりやすい日本人英語アクセントでなければいけない。「こてこて」の日本人英語は、望ましくない。相手にとってわかりにくい。日本人アクセントを残しながら、基本的な英語発音ができることが望ましい。少なくとも、基本的な英語発音に近いものが良い。具体的には、筆者個人として、政治家「片山さつき」、宇宙飛行士「向井千秋」などの英語がその典型であると考えている。もちろん、それ以上に「いい発音」であれば、なおさら良い。

できれば、/th/, /f/, /v/, /r/ と /l/ の区別などはできた方が良い。日本人なのだから、ある程度子音と子音の間に母音が多く入っても仕方ない。また、イントネーション・パターンが

英語のそれと同じでないの方がむしろ普通であろう。

Native の発音に近いかどうかで英語コミュニケーション能力を判断すべきではない。英語能力をよくこの基準で判断することがある。例えば、「あの人が、英語がほんとうに上手ですね」というとき、発音が native に近いことを言っていることが多い。英語スピーチコンテストで、発音が native に近いかどうかだけでジャッジするようなものである。発音コンテストではない。発音が native-like であるのが重要なのではなくて、いかに自分の考えを伝えることができるかが英語能力で大事である。

国際的に見て、外国人にとってわかりやすい発音を習得する。すぐ上記のところと重複するところも多いが、主張したいのは、コミュニケーションが目的なのだから、そのためには発音のわかりやすさもその要素に入るということである。あまりに何を言っているかわからなければ、伝える能力は格段に低くなる。インドの人は、自分の英語に自信を持ち、どんどん英語を話すという意味では、我々は学ぶところが多い。だが、あまりにインド・アクセントが強いと我々は何を言っているかわからない。「私の言っていることがわからないのか、あなたの英語力が低い」というように、自信を持つこと（日本人はこの自信に欠けている）はいいが、わからない英語を話されて、そのように言われても当惑してしまう。シンガポール英語も同様である。アクセントはあっても、わかる英語を話す必要がある。つまり、国際英語である。国際英語あるいは国際共通英語とは、何か一様なものを言っているわけではなくて、それぞれの国・文化、母語の影響を残しながら互に通じる、通じやすい英語と定義できるであろう。アメリカ英語、イギリス英語を流暢に話して、アメリカ人、イギリス人と誤解されるか、あるいは国籍不明されてしまうより、自国のアイデンティティを持ちながら、英語をツールとしてコミュニケーションしていくことが重要である。例えば、イタリア人が流暢なイギリス英語を話して、イギリス文化に同化してしまうように見える場合、外から見て何か違和感を覚える。本人にしてもそうであろう。意思疎通のため、あるいは観光客を呼び寄せるために、あるいはイタリア製品を海外に売り込むために英語を使うのかもしれないが、何ゆえにイギリス英語、イギリス文化に同化する必要があるだろうか。

文法

英語文法の変則的な (idiosyncratic) ところは無視し、一般ルールにしたがってしまう、という意味でのブローケンな英語を許容する。そういうブローケンな英語を奨励するわけではない。あくまで許容するということである。例えば、名詞の単数・複数形。Carp の複数形は carps とか。Furniture の複数形も furnitures (animal の複数形が animals なら、furniture の複数形が

furnitures であってもおかしくない)。「Just でも now でも現在完了形に使えるが, just now は使えない。過去形で用いる。」こういった何とも理解しがたい, 意味合いのないルールは無視してもいいであろう。また, 複雑なルールは, 簡素化, あるいは代替表現で済ませる。例えば, 付加疑問である。すべてを is it?, isn't it? と簡素化することもできる。意味は通じる。あまりに簡素化していると憚れる場合は, 代替表現として ~right? と表現するのがいいかもしれない。

語彙

日本固有のもので世界的に認知されているものは, 日本語を単にローマ字化する。sushi, tempura, tofu, futon, manga, bonsai, teriyaki chicken などはずでに英語の言語に入っている。

英語にありながら日本独自の発展を遂げたもの, 日本独自のジャンルを作り上げたものはその「和製英語」をそのまま用いる。anime (アニメ), karaoke (カラオケ), sharp pen (シャープペン), pokemon (ポケモン) など。

英米で使用される場合とはニュアンス, 意味が異なる場合でも, 日本で英語を使う場合(訪日外国人に英語を使う場合)は日本での意味を理解してもらう。

例えば, “toilet” という語彙がアメリカで便器そのものを意味して, イメージが悪いとしても, 日本では普通の言葉である。カタカナ英語で使われるために, 「便所」と和語で言われるよりいい。「便所」という表現は現在では直接的すぎる。日本に来るアメリカ人であれば, その理解が必要である。少なくともその事情への寛容性が必要である。

語彙というわけではないが, 英語のことわざの “A rolling stone gathers no moss.” は, イギリス, アメリカで解釈, 意味するところが異なる。前者では否定的, 後者では肯定的な意味を持つ。語彙やこうした表現が, 地域・文化が異なる場所では異なる意味を表すことがあっても不思議ではない。トイレ (toilet) の語彙についても同じである。日本では, 「トイレを利用する／トイレに行く／トイレをかりる」は普通の表現である。したがって, May I use your toilet? I'm going to the toilet. などと表現するかもしれない。ところが, アメリカなどでは, toilet は単に便器を意味する。だから, 日本の英語はおかしいと言う。だが, ここは日本であって, 少々向こうとは違う表現の仕方があっても当然である。いや, 英語では(アメリカ英語では) bathroom と言う, と訂正を求めてきたりする。だが, 日本で “I'm looking for a bathroom.” と, どこかの駅, デパートなど公共の場で言われると, 「お風呂なんて, こんなところにはないな, どうしてそんなこと聞くんだろう?」と思われるかもしれない。この質問をした英語話者は「トイレ」にはすぐには行けないかもしれない。

JR のグリーン車は, Green Car でいいであろう。日本で使う限りは, これでいいはずだ。日

本に来たら、「Green Car に乗る」と表現するように訪日者が学ぶべきと考える。「英語的」に表現すれば、upper-class car とでもなりそうだが、日本ですでに Green Car という用語、表現が一般的に使われている。そうであれば、日本来訪者にとっては、green car という日本の表現を学んだ方が得であり、妥当であろう。実際、JR ではグリーン車を英語で表記、アナウンスする場合 Green Car と呼んでいる。

インドでは hotel がレストランの意味も表し、シンガポールでは specs は仕様（詳細）ではなくメガネを意味し、フィリピンでは air-conditioner は日本と同じく aircon と呼ぶ。日本では、エアコン (aircon) は典型的な和製英語と言われ（批判され）、aircon では英語として通じないとまで言われることがある。だが、フィリピンに行けば、すべて aircon である。どんなアメリカ人でも aircon が air-conditioner の意味を表すことぐらい問題なくわかる。

表現の仕方（スタイル）

十分に通じ、しかも文法的にも正しいのであれば、日本的な表現の仕方であっても、積極的に使うべきである。発言せず黙ってしまうより（これが多くの日本人の欠点）、まずは発話することである。その場合、「理解してもらえないかもしれないが、英語の『自然な』表現ではないかもしれない」などと考えて発言を控えようとするのはナンセンスである。Honma (2008, 2012) は、日本人と native の表現の仕方の違いとして、次の例を挙げている。約束していた会合に友人が現れず、後日あった時に、日本人であれば、“I went there. Why didn't you come?” と発言する。一方、native であれば“I was there. Where were you?” と発言するのが自然のようである。また移動の交通手段を言う場合でも、日本人であれば、“I went to Kyoto by car yesterday.” と発言する一方、native であれば“I drove to Kyoto yesterday.” と発言するの普通であるようである。英語教育、英語習得において native 的な「自然さ」がことさら重要視されることがあるが、「めざすべき日本人英語」としてはそうした「自然さ」ではなく、communicability（通じるかどうか）を重視すべきである。しかも、我々日本人の英語使用の相手が英語 native とは限らない。他の non-native に対してそのような「自然な」英語がよりわかりやすいとは限らない。また、そのような「英語らしさ」を気にしては、コミュニケーションできない。

デイビット・セインの『日本人のちょっとヘンな英語』（2012）、『日本人のちょっとヘンな英語 2』（2014）が持ち出すような native 英語は、現代の英語状況を無視して、あまりにアメリカ英語の押し付けをしているようである。セイン（2012）では、“How are you?” という挨拶の表現は「死語」であり、“How are you doing?” なら良い。また、その挨拶への返事も、“Fine,

thank you.”は「死語」であると威圧してくる。このように「死語」とレッテルを貼られたりするが、その考え方こそが時代遅れである。

言語は変化、発展する。ある言語が違う地域に移った時、そこでの変化・発展と元の地域での変化・発展が異なるのはきわめて普通のことである。英語はイギリスからアメリカに移った。その移転にみる一つの例として、“I guess”という表現を取り上げてみる。この表現はイギリスでは廃れていったが、現在アメリカでは普通に使う。別の例で言えば、シンガポールでは、メガネを“specs”という古い表現を用いるし、インドではお店は“shoppe”というこれもまた古い表現を用いる。日本で、現在アメリカであまり使われない表現が使われていたからといって、「ヘンな」英語というのは当たらない。

5. 結 び

以上が「日本人のめざすべき英語」についての主張である。だが現実には、日本ではまだまだ native 英語が主流かもしれない。イギリス英語でもなくアメリカ英語でもなく、世界で通じる日本人英語では、英語学校に人は集まらないかもしれない。それでも時代は変わりつつある。以前であれば、オーストラリア人は英会話教師には歓迎されなかった。現在ではそんなことはない。英語の学習対象が、アメリカ英語、イギリス英語でなければならないという価値観はほぼ消えている。(ただ、やはり native 英語でなければいけないという価値観は依然として強い。)

インターネットを検索してみても、ここでの主張と軌を一にするものが多くアップされている。

「英語は「インド式」で学べ！ 3」YouTube

「アジア人が英語を話せて、日本人が話せない理由 // Why Japanese people have a harder time learning English. [#065] YouTube

「クローズアップ現代 どこまで必要？ 日本人の英語」YouTube

またこの論文で取り上げたセイン (2012) に対し、本論文と同様の批判を加えているウェブサイトもある：「『日本人の英語はおかしい』と主張する本の英語がおかしい件について。『日本人のちょっとヘンな英語』：MANGA 王国ジパング」。

ここでのこのような考え方と同様なものも現れてきてはいるが、日本で native の英語と native ではないが通じる英語を並べられた場合は、やはり前者を選ぶ傾向にある。そう並べられれば無理からぬところであるが、結果として native の英語を目標としてしまい、つまりと

うてい達成不可能な目標を立てることになってしまい、「悪循環」に陥る。そうした場合、英語を non-native だが公用語としている国に語学留学するのも一つの手かもしれない。例えば、フィリピンへの語学留学である。あるいは、現地に行かずともネットで英語レッスンを受けることができる。フィリピンとでは時差がほとんどなく（1時間）、native からのレッスン料と比べて格安である。

ともかく英語に関わる現実の世界の情勢を見れば、考え方も変わるであろう。アメリカ、イギリスといった native 英語圏に行ってもわからないかもしれないが、non-native でありながら英語圏である国、例えば、インド、フィリピン、シンガポールなどに行けば、何が本当の現実なのかわかるであろう。イギリス、アメリカなどに行っても、non-native の人と英語でコミュニケーションしてもわかるであろう。そうした non-native との英語によるコミュニケーションから、何が学ぶべき英語かということがわかるはずである。

参考文献

- Water, Red, 「クローズアップ現代 どこまで必要？ 日本人の英語 2009 05 31 22 39」YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=DGsxXXbhqyE>, 2015.07.05 アップロード.
- 鈴木孝夫, 1999, 『日本人はなぜ英語ができないか』, 岩波新書, 岩波書店.
- セイン, デイビット, 2012, 『日本人のちょっとヘンな英語』, アスコム.
- セイン, デイビット, 2014, 『日本人のちょっとヘンな英語 2』, アスコム.
- 大学英語教育学会第 47 回大会, 2008, 「グローバルな英語コミュニケーション能力とは—英語教育再考」.
- 大学英語教育学会第 50 回記念国際大会, 2011, 「英語教育への新たなる挑戦—JACET のこれからの 50 年—」.
- 田中 実, 2013, 「認知言語学の国際共通英語への教育応用の考察—問題点を中心に—, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 24 巻第 1 号, pp. 51-64.
- 田中 実, 2015, 「現代日本英語教育の三つの要素（認知言語学, 世界諸英語・国際共通英語, 外国語として英語）の考察」, 『川村学園女子大学研究紀要』, 第 26 巻第 2 号, pp. 161-173.
- 鳥飼玖美子, 2011, 『国際共通語としての英語』, 講談社.
- 日本政府観光局 (JNTO), 2015, 「2015 年 国籍別 / 目的別 訪日外客数 (確定値)」, http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2015.np.pdf (2016.1.26 入手).
- 日本旅行業協会 (JATA) 「海外旅行者の旅行先トップ 50 (受入国統計)」, <https://www.jata-net.or.jp/data/stats/2014/05.html> (2016.10.26 入手).
- バイリンガール・チカ, 「アジア人が英語を話せて、日本人が話せない理由 // Why Japanese people have a harder time learning English. [#065]」YouTube, https://www.youtube.com/watch?v=gy__2hH5IWY, 2012.10.07 アップロード.
- 本名信行, 2003, 『世界の英語を歩く』集英社新書, 集英社.
- MANGA 王国ジパング, 「『日本人の英語はおかしい』と主張する本の英語がおかしい件について。『日

- 本人のちょっとヘンな英語』, http://s.webry.info/sp/world-manga.at.webry.info/201310/article_5.html, 2013.10.26 更新.
- 森住 衛, 2008, 「日本人のための EIAL」, 『アジア英語研究』 第 10 号日本「アジア英語」学会.
- 安田 正, 2013, 「英語は「インド式」で学べ! 3」YouTube, <https://www.youtube.com/watch?v=0UG3NCXBtfo>, 2013.11.13 アップロード.
- 吉川 寛, 2014, 『国際英語論と大学英語教育』, 第 53 回 JACET 国際大会.
- 吉川寛・日野信行・松田文・石川有香, 2011, 「英語教育と文化—異文化コミュニケーション能力の養成—」, 大学英語教育学会第 50 回記念国際大会, pp. 137-142.
- Crystal, David. 2004, *The Language Revolution*. Cambridge, U.K.: Polity Press.
- Gardner. R. C., & Lambert, W. E. (1972) *Attitudes and motivation in second language learning*, Rowley, MA: Newbury House,
- Honna, Nobuyuki. 2008, *English as a Multicultural Language in Asian Contexts: Issues and Ideas*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- Jenkins, Jenkins. 2000, *The phonology of English as an international Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, Jenkins. 2006, "Current perspectives on teaching World Englishes and English as a lingua franca", *TESOL Quarterly*, 40, 1, 157-181.
- Jenkins, Jenkins. 2007, *English as a lingua franca: Attitudes and identity*. Oxford, England: Oxford University Press.
- Kachru, Braj. 1986, *The Alchemy of English: The Spread, Functions, and Models of Non-native Englishes*. Chicago: University of Illinois Press.
- Kachru, Braj. 1992, *The Other Tongue: English across cultures*. 2nd Ed. Urbana: University of Illinois Press.
- Matsuda, Aya. 2011, "Teaching English as an International Language: FAQs", *JACET the 50th International Conference*, pp. 43-49.
- Smith, Larry. 1976, "English as an international auxiliary language", *RELC Journal*, 7, 2, 38-53. Also in L. Smith (ed.) 1983, *Readings in English as an International Language* (pp. 1-5). Oxford: Pergamon Press.
- Smith, Larry. 1978, "Some distinctive features of EIL vs. ESOL in English language education", In L. Smith (ed.) 1983, *Readings in English as an International Language* (pp. 13-20). Oxford: Pergamon Press.
- Smith, Larry. 1983, *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- Yano, Yasutake, Joseph Lo Bianco, Mae-Ran Park, and Nobuyuki Honna. 2011, "Language policies in foreign countries—their achievements and problems—What can we learn from them?" *JACET the 50th International Conference*, pp. 134-136.